

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：33927

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520118

研究課題名(和文) アントワーヌ・ヴァトールの生きているかのような彫刻表現の生成と意義について

研究課題名(英文) Genesis and Significance about the Vivid Representation of the Sculpture-within-a-Picture in Watteau's fete galante.

研究代表者

杉山 奈生子 (Sugiyama, Naoko)

愛知産業大学・その他の研究科・准教授

研究者番号：30547493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀フランスの画家ジャン＝アントワーヌ・ヴァトール(Jean-Antoine Watteau, 1684-1721)が創始した雅宴画について、紳士淑女が庭園に集う遊興の図の中に生きているかのように描き込まれた裸婦彫刻に着目し、その生成のプロセスおよび意義を解明した。作品自体とともに、作品を取り巻く文化的・社会的コンテクストからの資料を用いた研究手法により、ヴァトールおよび18世紀フランス美術の新たな解釈の可能性が提示された。

研究成果の概要(英文)：We explained the genesis and the significance about the vivid representation of the sculpture-within-a-picture in Antoine Watteau's(1684-1721) fete galante, which is a French term used to describe a category of painting and features elegant gentlemen and ladies at play in the parkland settings. And we proposed the possibility to understand Watteau's paintings and the context of the 18th-century French art in a new way.

研究分野：西洋美術史

キーワード：18世紀フランス美術 アントワーヌ・ヴァトール 雅宴画 画中彫刻 美術アカデミー ロココ ロジェ・ド・ピール ケリュス伯

## 1. 研究開始当初の背景

報告者は、1999年に日本学術振興会特別研究員(DC1)として採用されて以来、ロココ美術の創始者とも称される、18世紀フランスを代表する画家ジャン＝アントワーヌ・ヴァトー(Jean-Antoine Watteau, 1684-1721)に関する研究を、国内外の研究状況を把握しながら、彼の代表的な絵画ジャンルである雅宴画(フェート・ギャラント、*fêtes galantes*)の中の彫刻モチーフを中心に進めてきた。

現在のヴァトー研究においては、従来の研究手法である主題・意味の解明や様式論とともに、1984-1985年の大回顧展(パリ、ベルリン、ワシントン)での研究の飛躍的發展以降、ヴァトーと音楽、舞踊、サロン文化、会話文学との関係など、これまで見過ごされてきたテーマの研究が発表されている。しかしながら、報告者が取り上げた雅宴画に登場する彫刻というテーマは、ミリモンドとセーフェルトによる図像学的な研究のみに止まっており、包括的な研究が決して成されなかったものである(Albert Pomme Mirimonde, "Statues et emblemes dans l'œuvre d'Antoine Watteau", *Revue du Louvre et des Musées de France*, 1, 1962, pp.11-20; Calvin Seerveld, "Telltale Statues in Watteau's Painting," *Eighteenth-Century Studies*, 14, 2, Winter, 1980-1981, pp.151-180)。

そこで、報告者は論文「ヴァトーの『画中彫刻』表現についての一考察」(『美術史』第149冊, 美術史学会, 2000年, 97-112頁)において、ヴァトーの全作品215点の内57点、つまり全体の約4分の1という他の画家に比べてもかなり高い割合で彫刻モチーフが描かれていること、特に、庭園で紳士淑女が恋愛や娯楽に興じる雅宴画では半身像や柱像よりも全身の生々しい裸婦像がたびたび登場すること、その登場の時期は雅宴画の形成期である1715年頃であることを明らかにし、ヴァトーの描いた彫刻がヴァトー研究において注目すべき課題であることを主張した。

さらに、課程博士論文(『アントワーヌ・ヴァトーの雅宴画における彫刻表現について』名古屋大学大学院文学研究科, 2005年)において、(1)ヴァトー全作品に占める彫刻表現の統計的・年代の実態(割合と主題、画業での位置づけに関する主要作品目録での精査)(2)彫刻表現の生成過程(視覚的源泉に関する、ヴァトーやオールド・マスターの素描・油彩画・版画からの借用関係、および古代彫刻版画集からの借用例の調査)(3)画中に描かれた彫刻モチーフの機能(イメージの中のイメージという共通項を有する「画中画」の役割と変遷に関するアンドレ・シャステルによる先行研究の参照および、ルネサンス以降の「画中彫刻」の機能と変遷に関する独自の調査を基にしたヴァト

ー作例の検討)を明らかにし、雅宴画に描かれた彫刻は、ウェヌスやクピドといった恋愛に関する神話的モチーフが意図的に選択されることで、単なる庭園のオブジェに止まらず、恋愛に興じる紳士淑女の心理的状況をほのめかす高機能な存在であることを主張した。そして、21世紀COE研究員、グローバルCOE研究員として、これらのテーマを継続発展させながら、世界の学界に向けてフランス語の論文を発表した。

以上のように、報告者は一貫してヴァトーが描いた彫刻モチーフの研究に従事しながら、その生成のプロセスや意義について一定の成果を出してきたが、全貌を解明するには、作品自体の研究とともに作品をとりまく社会・文化的コンテクストというより大きな視野に立った調査・研究が必要である。

## 2. 研究の目的

本研究は、従来アプローチの難しかったヴァトーの雅宴画解釈を、作品自体とともに作品をとりまく文化的・社会的コンテクストからの資料を用いて試みるものである。具体的には、18世紀初頭にヴァトーが創始した絵画ジャンル、雅宴画における彫刻表現に対する意図を、制作者であるヴァトーおよび受容者である当時の美術愛好家に関する資料などから浮き彫りにし、美術が公的なプロパガンダとしての役割から私的な鑑賞のための役割へと変容しつつあった18世紀フランス美術の様相について、主に次の3点を明らかにするものである。

(1)なぜヴァトーが雅宴画に生きているかのような彫刻を描き込んだのかを、ヴァトーという作者の側から探求する。

これまでに報告者は、ヴァトーの彫刻表現の年代的・統計的な実態を明らかにし、実証的な生成プロセスに関して、前テキストとしてのヴァトー自身の絵画・素描からの引用関係、間テキストとしてのヴァトー以前の絵画・彫刻・版画からの借用関係を踏まえながら明らかにするなど、彫刻表現の様相の一部を浮き彫りにしてきたが、雅宴画の彫刻表現に対する意図はいまだに解明されていない。この核心とも言える問題を明らかにしない限り、雅宴画の彫刻表現については雅宴画の全容解明に到達したとは言いがたい。

出入りを許されたリュクサンブール庭園などで見た庭園彫刻、あるいは、芝居絵作家として馴染みの深かったイタリア喜劇やフランス喜劇の舞台道具としての彫刻は、ヴァトーにとって身近な存在であり、素描や油彩画にたびたび彫刻モチーフを採用していることから、彫刻への関心の高さがうかがえる。そして、雅宴画の主題は宮廷恋愛詩に文学的源泉をもち、恋愛に関するモチーフが必然であるが、絵画での裸婦表現の伝統や当時の道徳的な制約から世俗的な裸婦を登場させることは困難であり、合理的に裸婦像を

導入できる神話的題材の庭園彫刻を採用したことが予想される。

(2)上記の問題を、ヴァトーをとりまくコンテキスト、つまり、18世紀初頭フランスの社会的・文化的背景(美術理論、美術受容、サロン文化など)から検討する。

美術受容の面では、石の彫像を愛という強い感情によって生身の人間へと変容させる物語ピュグマリオン神話の表象や、美術愛好家が愛でるために生々しく官能的に描かれた古代彫刻版画集の流行、サロン文化の成熟や美術愛好家の台頭、理性よりも感性を重視したロジェ・ド・ピールの美術理論の席卷など、公的なプロパガンダの美術ではない、官能的な裸婦像など、私的な鑑賞のための美術作品へのニーズが高まってきたことも背景として考えられる。さらに人体表現の肉の柔らかさを重視した16世紀ヴェネツィアのドルチェの美術理論に着目し、この理論がヴェネツィア派の筆法とともに、ヴァトーの描いた彫像を筆頭に18世紀フランスの生々しい裸体表現に影響を与えたことを、理論書や当時の言説から検証する。

(3)彫刻表現の視覚的源泉に関して、ピュグマリオン神話、庭園や演劇を主題とした版画・絵画を新たに調査し、未調査の一部の古代彫刻版画集を調査・分析することで、ヴァトーの視覚的着想源、つまり彫刻表現の典拠を明らかにし、生成過程の全容を解明する。さらには、演劇・庭園芸術とヴァトーの彫刻表現との関連性を証明する橋掛としたい。

### 3. 研究の方法

本研究は、報告者がこれまで独自に調査してきたヴァトーに関する資料を有効な資料として利用するとともに、すでに研究目的で述べた問題設定の枠組みに沿って、以下の3点のように進められる。

(1)なぜヴァトーが雅宴画に彫刻を描き込んだのかを、作者であるヴァトー自身に関するテキストをもとに調査する。具体的には、ヴァトーの油彩画や素描についての作品目録を再検討し、ヴァトーの彫刻への関心の度合いや傾向を探る。素描については、ヴァトー研究の権威でフランス学士院会員のローザンバールが手掛けた詳細な目録(Pierre Rosenberg/ Louis-Antoine Prat, Antoine Watteau 1684-1721. Catalogue raisonné des dessins, 3vols., Paris, 1996)を用いて精査する。油彩画の目録については、エドモン・ド・ゴンクールによる目録(1875年)以来数回出版されているものの、1970年を最後に刊行されていないため、ルーヴル美術館をはじめ、作品の所蔵される現地にて、写真撮影も含めて、最新のデータを収集する。また、ヴァトーについて語られた同時代の文字資料は比較的少なく、小冊子として刊行

されているが(Pierre Rosenberg(éd.), Vies anciennes de Watteau, Paris, 1984)その中でも基本的な資料とされるケリュス伯による手稿については、パリのソルボンヌ大学付属図書館で再確認する(La vie d'Antoine Watteau, lue à l'Académie le 3 février 1748, manuscrit par Caylus, la Bibliothèque de la Sorbonne, Ms.1152, fol.17-27; manuscrit recopiée par son secrétaire et légèrement modifiée, la Bibliothèque de la Sorbonne, Ms.1152, fol.28-41)。

(2)ヴァトーの彫刻表現をとりまくコンテキスト、つまり、18世紀初頭フランスの社会的・文化的背景(美術理論、美術愛好家、サロン文化など)から探求する。

18世紀初頭のサロン文化や美術受容などに関する文献を精読し、文化史・社会史的な状況を把握する。また、裸婦表現に関する伝統と当時の状況を、絵画作品のCD-ROM、作品目録および欧米の主要美術館での調査を行い、変遷の様相とヴァトーの独創性の有無を検討する。美術理論については、生きているかのような人体を表象する上で、硬い骨ではなく柔らかな肉の表現が重視された言説(ドルチェの理論など)に着目し、関連する記述を美術理論書(主にルネサンス、17、18世紀のイタリアやフランス)から洗い出し、柔らかな肉についての理論とヴァトーの生きているかのような裸体彫刻との相関関係を検討する。

(3)ピュグマリオン神話、庭園や演劇を主題とした版画・絵画、古代彫刻を主題とした版画集を調査・分析することで、ヴァトーによる彫刻表現の生成の全容を明らかにする。

具体的には、パリのフランス国立図書館などで、ピュグマリオン神話や古代彫刻、庭園や演劇を主題とした版画を網羅的に観察し、彫刻表現の有無や特徴を調査・分析する。また、時間的制約の許す範囲で、古代やルネサンス以降の絵画・彫刻を、CD-ROM、作品目録および欧米の主要美術館での調査を行い、ヴァトーの視覚的着想源、つまり彫刻表現の典拠を検討する。

### 4. 研究成果

18世紀フランスの画家ジャン＝アントワヌ・ヴァトー(Jean-Antoine Watteau, 1684-1721)が創始した雅宴画は、紳士淑女が庭園に集い、恋愛や娯楽に興じる光景が描かれる。その中にまるで生きているかのような裸婦彫刻がたびたび描かれたことに着目し、その生成のプロセスおよび意義を解明した。

ヴァトーに関する最重要の一次資料であるケリュス伯によるアカデミー講演草稿の調査やヴァトーの作品調査とともに、作品を取り巻く文化的・社会的コンテキストからの資料を用いたことにより、あらたな解釈の可能性を提示した。つまり、ヴァトーの雅宴画

が、これまでの公的なプロパガンダのために制作された絵画と異なり、私的に純粋に愛で愉しむための絵画であり、画中の生きているかのような裸婦彫刻には、18世紀フランスの新しい美術趣向が逸早く反映されていることを明らかにした。そして、これらの成果を論文として発表した。

報告者の本研究の特色と成果、およびその波及効果を、3つの点から記す。

(1)美術史学という枠組みの中で、ヴァトーという18世紀フランスを代表する画家の中心的な絵画ジャンルである雅宴画の特徴を、彫刻表現の生成と受容という合わせ鏡による解釈を通して明らかにした。

雅宴画は、伝統的な聖書や神話を扱った物語のある絵画(物語画)ではなく、上流階級の風俗的な場面を幻想的な表現とともに表象した新しいジャンルであり、主題の確定が難しいこと、ヴァトー自身による文字資料が皆無に等しく、同時代人の関連資料も短い伝記に終始するなど、直接的な文字資料から作品解釈することが困難な状況である中、報告者のアプローチは、ひとつの新しい研究手法を提示した。

(2)作品の制作過程とともに、美術愛好家による作品鑑賞という観点から追及することで、17世紀フランスには見られなかった新しい美術受容の在り方(純粋に愛で楽しむための絵画)を、18世紀初頭のヴァトーの作品解釈を通して提起した。また、そのことにより、文化的貢献が期待される。

(3)研究資料として、ハイ・アートと呼ばれる絵画や彫刻のデータを用いるだけでなく、18世紀に流通の盛んになった版画を史料として積極的に利用し、これによって、一部の特権階級に限られた美術受容が、大衆、公衆と称される存在が大きくなり、マス・メディアの先駆的存在である版画や美術館の誕生(ルーヴル美術館の開館は1794年)によって、不特定多数の人々のための近代的な美術受容へと移行する過程が明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

杉山奈生子、画家ヴァトーに関するアカデミー講演録(3)~ソルボンヌ大学図書館所蔵の手稿(Ms. 1152, fol. 17-41)を巡って~、造形学研究所所報(愛知産業大学造形学部発行)査読無、第11号、2015、pp. 1-6

杉山奈生子、画家ヴァトーに関するアカデミー講演録(2)~ソルボンヌ大学図書館所蔵の手稿(Ms. 1152, fol. 17-41)

を巡って~、造形学研究所所報(愛知産業大学造形学部発行)査読無、第10号、2014、pp. 1-4

杉山奈生子、画家ヴァトーに関するアカデミー講演録(1)~ソルボンヌ大学図書館所蔵の手稿(Ms. 1152, fol. 17-41)を巡って~、造形学研究所所報(愛知産業大学造形学部発行)査読無、第9号、2013、pp. 1-4

杉山奈生子、18世紀フランス美術の身体表象に関する言説~ロジェ・ド・ピール、ファルコネを中心に~、造形学研究所所報(愛知産業大学造形学部発行)査読無、第8号、2012、pp. 1-4

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

杉山 奈生子 (SUGIYAMA, Naoko)  
愛知産業大学・大学院造形学研究科・准教授  
研究者番号: 30547493

(2)研究代表者     なし

(3)連携研究者     なし